青梅市文化財ニュース

第２９３号

平成２４年３月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

青梅市内にある遺跡の現状　その７

文化財ニュース第２５１号と第２８３号で霞川右岸にある遺跡についてご案内をいたしました。今回はその続きといたしまして、霞川左岸上流部から中流部までの遺跡をご案内することといたします。

霞川沿いと多摩川沿いのとの遺跡の立地で大きく違うところに川の浸食があります。多摩川沿いにおける遺跡は、川の浸食作用により形成された河岸段丘上における台地や、川が削り残した舌状台地上に多く分布することに比べ、霞川沿いにおいては、若干の浸食による微高地状の丘陵に存在しています。これは、川の流れの角度がなだらかなことや、川の長さ、霞川へ流入する降水面積の違いによる流入量の違い、断層による地形の違いなどが影響しています。この立地条件をもとに、上流から下流に向け、ご案内をすることといたします。

霞川は、天寧寺（てんねいじ）の池を源流とし、多くの支流を集めながら埼玉県との境、金子地域を抜け、入間川に流れ込み、荒川へと続いています。

この源流から南東へ４００ｍほどの台地上の所に遺跡①が有ります。特に名前は付けられてはいませんが、市立学校給食センター東方１５０ｍほどの丘陵上に位置しています。現在は、まばらに立木が立ち並ぶ荒れ地となっています。ここからは表面採集により、縄文時代中期後半の土器を中心に、中期前半、後期前半の土器や土師器（はじき）が見つかっています。

また、ここから南東２５０ｍほど隔たった小高い台地②は、都史跡の中世の城跡、勝沼城跡となっています。今でも空堀跡があちらこちらに残り、曲輪（くるわ）として残された４か所の平地が有ります。この地域もかつては縄文時代の生活の場であり、縄文時代中期から後期前半、古墳時代後半から奈良、平安時代の遺跡となっています。この台地の南側の裾には湧水による井戸もあり、斜面の中央部分には、おしゃもじ様が祀られ、祠の中には縄文時代に作られた石棒（せきぼう）が祀られています。

この石棒は、多産、安産の信仰対象として作られたものといわれ、市内の他の地域でも、祠の中で祀られている所が数か所あります。おそらく、土の中からとんでもない物が出てきたということで、祀るようになったものなのでしょう。

③は青梅市の埋蔵遺跡の分布図でＫ－５と付けられた遺跡です。この遺跡は、勝沼城跡のある台地がそのまま東に延び、バス通りにより寸断され、東側に残された台地上の

遺跡です。平成１２年１０月から平成１３年１月まで記録保存のための発掘調査として、２，９６０㎡にわたる大規模な発掘調査が行われました。

その結果、先土器時代の尖頭器やスクレーパー、縄文時代の石鏃や礫器、敲き石、そして縄文時代早期撚糸文系の土器をはじめ、前期、中期、後期初頭の土器、そして、縄文時代、弥生時代の竪穴式住居跡や集石遺構、中世、近世、現代までの各種遺物が発見されました（詳細につきましては平成１３年９月発行「Ｋ－５遺跡」参照）。現在は住宅が立ち並び、遺跡の面影はまったく無くなっています。

④の遺跡は、宗泉寺から南東へなだらかに延びた高低差の少ない台地の先端に位置しています。この段下は東西に流れる水路が有り、遺跡の東側にある水路との囲まれた場所となっています。ここは、縄文時代中期前半の土器や古墳時代の土師器などが表面採集されています。現在は住宅地に挟まれた状況で畑は残っていますが、遺物の散布も無く、遺跡としての存在はつかみづらくなっています。

⑤は舌状台地に位置し、縄文時代中期後半の遺跡です。ここから、宅地造成の際、ほぼ完形の土器２点が掘り出され、焼土や柱穴らしき落ち込みなども確認されたことにより、住居跡と考えられています。現在では住宅地となっている部分が多く、狭い範囲での畑や空き地は点在するものの、遺跡全体としての確認は難しい状況となっています。

⑥は現在、吹上小学校が有る敷地を含める南側の丘陵地域で、馬場遺跡と呼ばれています。

広域にわたる遺跡となっており、昭和５７年７月１日から昭和５９年６月１５日まで延べ人員４５００名により青梅市遺跡調査会の下で発掘調査が行われました。

この遺跡は先土器時代から縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代にわたっており、市内の遺跡では大変珍しい遺物や遺構がたくさん発見されました。

最も古い時代につくられたものは、先土器時代の末期に作られた、細石刃と石刃核という石器です。信州の和田峠から産出された黒曜石というガラス質の石で作られています。

細石刃は、木などに埋め込んで作り上げた鑓などの刃の部分を構成するものです。また、石刃核は細石刃の母岩で、ほとんどのものが楔形となっており、いくつもの細石刃を縦に剥ぎ取った跡が見受けられます。

縄文時代のものでは、中期前半から後半にかけての集石遺構や動物などを捕るための落とし穴などが発見されました。縄文時代の住居跡はこの発掘調査では見つかっておらず、南側の台地上にあるであろうと推測されています。

弥生時代の遺構では、住居跡が４軒、再葬墓１基、方形周溝墓１基が発見されました。再葬墓では、弥生時代中期に位置する土器がほぼ完形のまま発掘され、その粘土の中に片岩砂粒が含まれていたことから、荒川流域などで作られ、青梅の地に持ち込まれた物であろうと言われています。

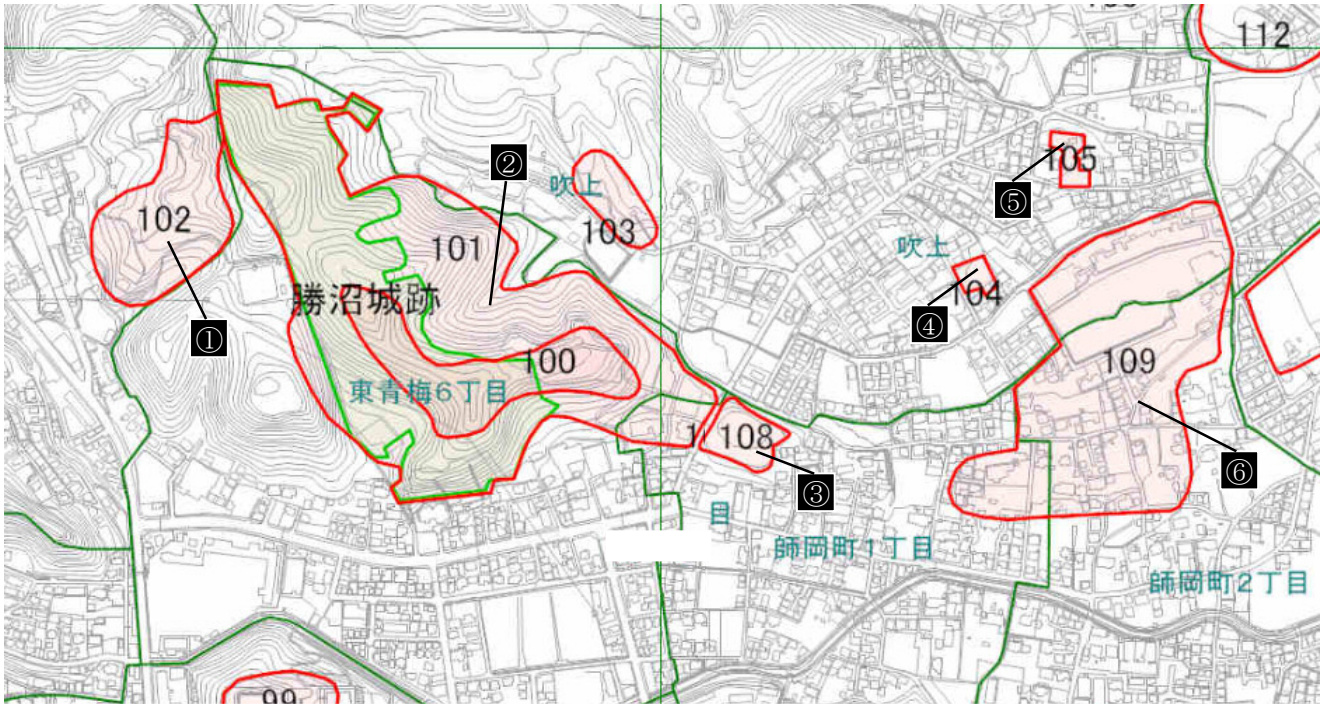
方形周溝墓は部分的な範囲での発見ではありましたが、弥生時代中期後半のもので、

青梅市内では初めての発見です。

石器では、弥生時代中期後半から後期前半に作られたと思われる有孔磨製石鏃や石鍬、抉入石斧、砥石なども見つかっています。

また、奈良、平安時代の遺構で特殊な構築物が発見されました。それは灌漑施設と井戸を兼ねたもので、湧水を湧き出し口から樋により導き、堰止めの施設を途中に作り水を溜め、そこで水を利用できるようにした後、溢水を水田へ導いて行くという水路です。

その構造では、当時使っていた建築材を再利用し、堰板や樋にし、樋の底に竹を敷くことにより濁り防止策をしていたことがわかりました。水溜は東西７０ｃｍ、南北９０ｃｍ深さ４０ｃｍの大きさで、付近には、須恵器や土師器、籠や木鉢、砧杵などの木器類、モモやヒョウタンの種などが発見され、生活水を供給する上で貴重な水場であったことを物語っています。（続く）　　（文責・鈴木晴也）



霞川沿いの遺跡（東京都教育委員会発行「東京都遺跡地図」から）

※○内に番号を付けたものを今回紹介しています。三桁の数字は青梅市の遺跡番号を表しています。